様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ７ 月　 ６ 日現在

機関番号：７２８１０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０９４２

研究課題名（和文）中央アナトリア西部における鉄器時代フリュギアの遺物研究

研究課題名（英文）Archaeological Study of the Phrygian Cultural Material of West-Central Anatolia

研究代表者
山下　守（Yamashita, Mamoru）

（財）中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員

研究者番号：７０３７０１９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　２０１１年から２０１３年までトルコ共和国のエスキシェヒル考古学博物館において、中央アナトリア西部地域の鉄器時代西部フリュギア文化の地域的特徴を把握する目的で、同地域出土のフリュギアの様々な遺物に対して考古学的な調査研究を行った。
　研究の結果、中央アナトリア西部の西部フリュギア文化が、ギリシャ、リュディアなどの西方文化と隣接すると言う地理的条件から、こうした西方の文化とアナトリアの内陸文化の交流関係において重要な仲介者的な役割を果たしていた可能性のあることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　From 2011 to 2013 we studied the Phrygian cultural material of West-Central Anatolia in the Eskisehir Archaeological Museum. The purpose of this archaeological research was to better understand the distinctive features of the West-Phrygian Culture in this region.
　The results of this study suggest that the West-Phrygian culture played an important mediatory role in the cultural interaction between Anatolia and the west.

研究分野：人文学 B

科研費の分科・細目：史学・考古学：３１０５

キーワード：考古学　アナトリア　鉄器時代　フリュギア

１．研究開始当初の背景

中央アナトリアの鉄器時代考古学研究の中心をなすのは、フリュギア研究である。フリュギア研究では、１９５０年以来アメリカのペンシルベニア大学によって組織的発掘調査が行われている中央アナトリア中部のフリュギア首都址ゴルディオンが常に主導的な役割を果たして来た。それ故フリュギア文化の問題はこれまですべてこのゴルディオンを基準にして論じられる傾向が強く、特にフリュギア文化の構造、変遷過程、編年に関しては、専らゴルディオンの調査結果を基礎にして組み立てられた枠組みが、フリュギア全地域に一律に適用されて来た。

１９９０年代以降に中央アナトリア東部にある遺跡の調査、特に中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所によるカマン・カレホユックの発掘が進展し、フリュギア東部に当たる地域における鉄器時代文化の様相が解明されるところとなった。その結果、この地域のフリュギア文化には、ゴルディオンを基準に構成されたフリュギア中心文化の発展図式には当てはまらない変遷過程が確認されたほか、ゴルディオンとカマン・カレホユックのフリュギア文化の編年の間にも大きな矛盾が存在することが明らかになって来た。

この様にフリュギア東部文化の地域的な様相が解明され、これまでのゴルディオンを基準にしたフリュギア文化圏全体の一元的理解に矛盾が生じて来た結果、 最近のフリュギア研究では、こうした事態に対応して二つの動向が生まれて来ている。その一つは中央アナトリア中部のフリュギア核地域において複数の遺跡調査によってゴルディオンを相対化する形でフリュギア中心文化を体系的に把握し直そうと言う動きであり、もう一つはフリュギア周辺地域に当たる中央アナトリア東部、西部、南西部における多様な考古学的調査研究を通してフリュギア文化の地域的変化の詳細を明らかにし、フリュギア文化を中心と周辺と言う観点から多元的に捉え直そうと言う動きである。

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所は、カマン・カレホユックの発掘調査を通じて長らく中央アナトリア東部のフリュギア東部文化の解明に取り組んで来た。しかし上述した様な最近のフリュギア研究における動向を踏まえ、フリュギア文化を地域性に基づき多元的に把握すると言う立場に立ち、今後はカマン・カレホユックでの研究成果を基盤にして、中央アナトリア中部及び西部のフリュギア文化の調査研究にも取り組む方針を決定した。そして先ずゴルディオンから独立して中央アナトリア中部のフリュギア中心文化の構造とその発展過程を捉え直すことを目的として、 ２００７年より中央アナトリア中部のフリュギア最重要遺跡の一つであるハジュトゥール・ホユックにおいて調査研究を開始した。特に２００８年から２０１０年までは科学研究費補助金の助成を受け、同遺跡で組織的な考古学予備調査を行った。その結果、このハジュトゥール・ホユックは前期から後期フリュギア時代まで(およそ前９世紀から前４世紀まで)フリュギア全時代に渡って継続的に居住され、遅くとも中期フリュギア時代中葉(前７世紀)までには巨大な城壁に囲まれた大都市に発展していたことが判明するところとなった。

さらにまたこの予備調査で採集された遺物の研究からは、中央アナトリア中部のフリュギア中心文化が、ギリシャ、リディア等の西方文化からかなり強い影響を受けていたことが確認されたことから、これまで研究がほとんどなされて来なかった、両者の間に介在するフリュギア西部文化のフリュギア中心文化の発展における役割が新たに問題視されるところとなった。

この様にハジュトゥール・ホユックにおける予備調査の結果、フリュギア文化の発展におけるフリュギア中心地域と西部地域の文化的相互関係の問題が提起され、フリュギア文化の発展過程の研究を進める上ではフリュギア西部文化の研究が不可欠であることが認識されるに至った。

アナトリア考古学研究所では、こうした中央アナトリアの鉄器時代フリュギア文化の研究における最新の成果を受けて、フリュギア中心文化の発展過程の解明を目的とするハジュトゥール・ホユックにおける考古学的調査とタイアップする形で、フリュギア文化発展におけるフリュギア中心地域と西部周縁地域の有機的関係の解明を目的とする中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の考古学研究を進めることが計画された。

２．研究の目的

本研究は、上述の様な背景をもって計画されるに至った中央アナトリア西部のフリュギア西部文化に関する本格的考古学研究に必要不可欠な基礎的な資料、情報を収集するための予備的調査研究として実施された。その目的とするところは、２０１１年から２０１３年までの間に、中央アナトリアにあるアンカラ・アナトリア文明博物館、コンヤ考古学博物館、エスキシェヒル考古学博物館、アフヨン・カラヒサル博物館、キュタヒヤ博物館、ブルドゥル博物館の六つの博物館が所蔵する、中央アナトリア西部で発見された鉄器時代フリュギアの土器、金属製品等の考古資料を調査、記録し、さらにこれを中央アナトリア中部と東部のフリュギア資料と比較研究することによって、中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の地域的特徴を把握す

ることにあった。

３．研究の方法

本調査研究は、上述の様な研究目的を達成するために、具体的には以下の様な手順で行われた。

（1）先ず予備調査として、エスキシェヒル考古学博物館、アフヨン・カラヒサル博物館、キュタヒヤ博物館、ブルドゥル博物館の四つの博物館[1]においてフリュギア西部地域に該当する中央アナトリア西部で発見された鉄器時代フリュギア土器、青銅製品、鉄製品等の資料を実見し、遺物リストを作成した。実見した遺物の中から本研究の目的に適した代表的な資料の選定を行った。

(2) (1)の予備調査で選定された中央アナトリア西部出土のフリュギア遺物に対し、実測、写真撮影及び形態的特徴の精査を行った。

(3) 精査の結果に対し、こうした中央アナトリア西部のフリュギア西部地域から出土したフリュギア遺物の地域的特徴を把握するために、主にゴルディオンとハジュトゥール・ホユックに代表される中央アナトリア中部のフリュギア中心地域と、主にボアズキョイとカマン・カレホユックに代表される中央アナトリア東部のフリュギア東部地域から出土したフリュギア資料との間で形式学的な比較研究を行った。

４．研究成果

(1) トルコ文化省考古局の遺物調査の許可の下に中央アナトリア西部のエスキシェヒル考古学博物館、アフヨン・カラヒサル博物館、キュタヒヤ博物館、ブルドゥル博物館において実見することが出来た中央アナトリア西部の鉄器時代フリュギアの遺物資料は、土器２８４点、青銅製品２１５点、鉄製品１８６点、土製品９８点、骨製品７７点の合計８６０点であった。

これらの内、最近の学術的発掘調査において発見され、調査、発表権が発掘者に制限されている３８６点を除く４７６点の資料が、本調査研究での利用を博物館側から許可された。

これらの調査可能な中央アナトリア西部の鉄器時代フリュギアの遺物資料の内、エスキシェヒル考古学博物館所蔵のミダス・シティー遺跡から出土した、未発表資料を含むフリュギア遺物が、中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の地域的特性を把握すると言う本調査研究の目的に最も適した資料であると判断し、これを重点的に精査することに決定した。

(2) エスキシェヒル考古学博物館所蔵のミダス・シティー遺跡から出土したフリュギアの遺物の内、保存状態が良好で、比較研究に最適と考えられる代表的資料として、土器８５点、青銅製品１２６点、鉄製品１０３点の合計３１４点を選定し、実測、写真撮影した上で精査した。

これらのミダス・シティー遺跡から出土した遺物の他にも、エスキシェヒル考古学博物館が所蔵する中央アナトリア西部の鉄器時代フリュギアの遺物資料の中から、特に重要と考えられる土器４２点、青銅製品３４点、鉄製品１９点の合計９５点を選び、本調査研究における比較資料として一緒に精査した。

この中央アナトリア西部地域出土のフリュギア遺物に対する精査の結果は全体的に電子遺物台帳に記録され、遺物の実測図、写真はディジタル処理された上で電子ファイルに集成、整理された。

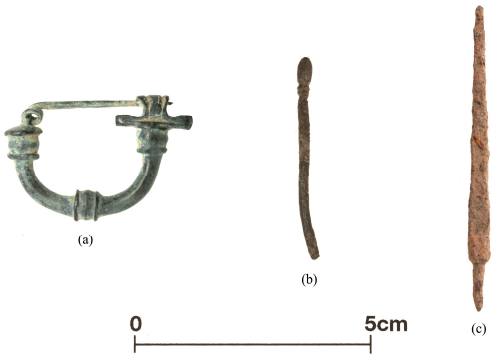
(3) この様なミダス・シティー遺跡に代表される中央アナトリア西部のフリュギア西部地域から出土したフリュギア遺物の調査の結果に基づき、同遺物資料の地域的特徴を解明することを目的にして、これらの資料の形式分類とフリュギア中心地域及び東部地域から出土したフリュギア資料との形式学的な比較研究を行った。

こうしたフリュギア西部地域出土の遺物資料に対する形式学的比較研究は、進行が計画よりも大幅に遅れ現在もまだ完了するに至っていないため、研究の最終成果をここで報告することは困難であるが、暫定的な研究結果として、中央アナトリア西部のフリュギア西部地域から出土したフリュギア遺物資料に確認出来る次の様な幾つかの際立った特徴を指摘することは可能である。

(A) 形式的に見て、中央アナトリア西部地域から出土したフリュギアの土器、青銅製品、鉄製品は、全体的に中央アナトリア中部のフリュギア中心地域のものとほとんど差が見られない。そのことは、例えば中期、後期フリュギア時代の灰色土器(写真 1)、中期フリュギア時代の青銅製フィブラ(写真 2-a)、青銅製ピン(写真 2-b)、中期、後期フリュギア時代の鉄製鏃(写真 2-c)等の例に顕著に見て取ることが出来る。

(写真 1) ミダス・シティー遺跡出土の灰色土器

[1]計画されていたアンカラ・アナトリア文明博物館とコンヤ考古学博物館における遺物調査は、トルコ文化省考古局より調査許可が下りなかったため中止された。



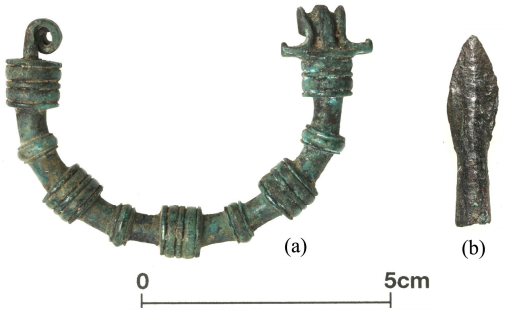
(写真 2) ミダス・シティー遺跡出土の青銅、鉄製品

(写真 3) 中央アナトリア西部出土の水差し形土器

(B) (A)の様な状況にもかかわらず、中央アナトリア西部のフリュギア西部地域から出土したフリュギア土器、青銅製品、鉄製品の中には、フリュギア中心地域や東部地域出土のものには見られない独特の形態的特徴を有するものが散見される。太くて長い頸部とクローバー形口縁部を持つ水差し形土器(写真 3)、針受け先端に膨らんだ突起のあるフリュギア式青銅製フィブラ(写真 4-a)、平坦に打ち延ばされたループ状の頭部を有する鉄製ピン(写真 4-b)等がそうしたフリュギア西部地域だけに認められる特殊な遺物形態の主な例である。この様な特殊形態はフリュギア西部に特有な地域的形式または変化形として捉えられる可能性が高い。

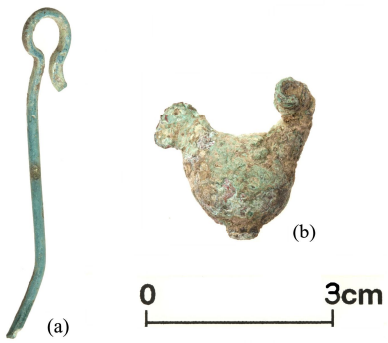
(写真 4) 中央アナトリア西部出土の青銅、鉄製品

(C) 中央アナトリア西部のフリュギア西部地域で出土した青銅製品の中には、主に西、南西アナトリアに分布の中心があり、おそらく鉄器時代リュディアと関連付けられるタイプのものが見出される。例としては、半円形を呈する弓部に一重と二重の円盤形装飾を交互均等に配したフィブラ(写真 5-a)や輪郭が楕円形に近い翼部を持つ袋穂式両翼鏃(写真 5-b)等が挙げられる。この様なフリュギア西部地域に見られるリュディアの遺物は、同地域がフリュギア中心地域と同様に中期フリュギア時代にリュディアから強い文化的影響を受けていた可能性を示唆している様に思われる。



(写真 5) 中央アナトリア西部出土の青銅製品

(D) さらにフリュギア西部地域で出土した青銅製品の中には、 フリュギア東部地域に分布の中心があるが、ギリシャ東部地域にも搬入されて分布が見られる M 字形青銅製ピンの例(写真 6-a)や、これとは逆にエーゲ海からギリシャ東部地域に分布の中心があるが、フリュギア中心地域や東部地域にも分布の見られる、弓部が大きく膨れた形の青銅製フィブラの例(写真 6-b)も確認された。これらの遺物はフリュギア中心／東部地域とエーゲ海／ギリシャ東部地域の間に存在した文化の交流関係がフリュギア西部地域を経由して行われていたことを実証する具体的な証拠として注目される。



(写真 6) ミダス・シティー遺跡出土の青銅製品

フリュギア西部地域から出土した鉄器時代フリュギア遺物に対するこれまでの形式学的比較研究から確認出来た以上の様な同遺物資料の諸特徴からは、さらに中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の特徴について以下の様な仮説的な結論を導き出すことが可能であると思われる。

(i)中央アナトリア西部のフリュギア西部文

化には、全快として中央アナトリア中部の中心文化から大きく逸脱し、変化したところはほとんど見られないので、両地域のフリュギア文化はほぼ同様の過程で発展したことが考えられる。
(ii)中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の細部において見られるフリュギア中心文化との差異は、他地域からの文化的影響に由来すると言うよりか、同地域においてフリュギア文化が発展定着して行く過程で起きた文化の地域化によって、西部地域のフリュギア文化に中心地域では見られない独特の特徴が付与されたことに由来すると考えられる[2]。
(iii) ギリシャ、リュディアと言う西側の二大文化と隣接する地理的条件から、中央アナトリア西部のフリュギア西部文化は、早い段階からこうした西方文化から強い影響を受けていたことが確認出来るが、フリュギア西部文化はこれらを内陸のフリュギア中心文化へ伝える一方、フリュギア文化を西側文化へも伝えると言う文化の媒介者、窓口としての役割を果たしていたと考えられる。

こうした仮説的な結論からも分かる様に、本調査研究の目的である中央アナトリア西部のフリュギア西部文化の地域的特徴を把握するためには、今後さらに同地域出土のフリュギア遺物の比較研究を進展させ、上述の(i)から(iii)の中でも(iii)の問題を特に深く追求して行く必要がある。

そしてこうした本調査研究の目的が最終的に達成された暁には、その研究成果は現在のフリュギア研究における難題の一つであるフリュギア文化の発展における諸地域間の有機的関連性の問題解明に重要な基礎を提供するばかりでなく、今後のフリュギア研究全体の発展にも大きく貢献することは間違いないと思われる。

[2] 中央アナトリア東部のフリュギア東部文化では、こうした地域化による顕著な文化変化が確認されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
山下　守（YAMASHITA MAMORU）
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号：70370195

(2)研究分担者
松村　公仁（MATSUMURA KIMIYOSHI）
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号：60370194

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：